

隼人族の森を渡る風

創造の現場から 第9回

森の彫刻家 上床利秋

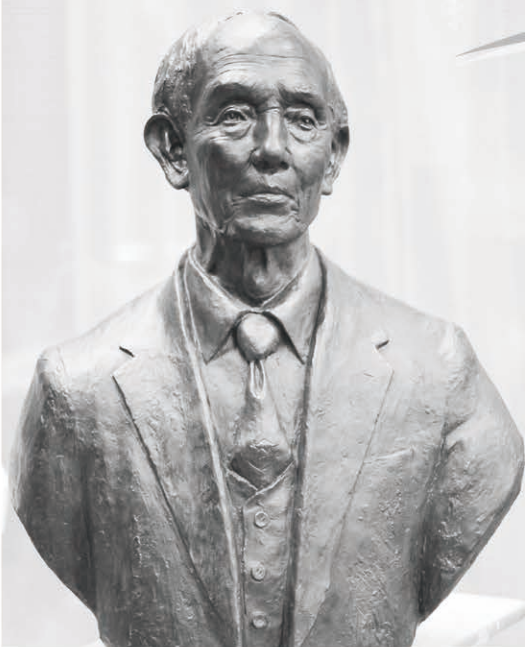
ぼつけもんの静かなる決断力

胸像制作とは、似せるといふ事は勿論の事、知性と経験を織り込んで肖像として表すことである。この度、依頼を受けて預かった写真から受ける印象と、伝え聞くヒガシマル会長の人柄とを、「ひとつの方針のもとにそれぞれが一杯の仕事をするれば最後はオレが責任を持つ」という会長として創ろうと考えた。

最初に拝見した東吉太郎氏の50歳代の写真は実績から得た自信に満ちてお



像高25cmのブロンズ夫婦像



創業者・東吉太郎 像高75cmブロンズ製 筆者作

り、穏やかでそしてオシャレな姿だった。まずその時代の姿を彫刻してみた。それから制作助手の丸田多賀美さんに普段着の会長の姿を写真撮影してもらい、制作を進めて、現在の表情に近づけた。そうして、制作も佳境に入る頃、会長ご本人に霧島市の杉アトリエにてネクタイ姿で直接モデルをしていただき、完成させていった。私は粘土原型完成前に家内と創



制作の流れ

業者の営む温泉「花木水」とそうめん流し「宮田石」に食事についてみた。その場所と建物の豪快な造りには目を奪われた。その大胆な着想を実現させる決断力は当時相当のものだったろう。

91歳に至るまでの様々な経験から刻まれた氏の顔の表情を、眉間や口元、喉首などに現れる変化を一つ一つ検証して、省略と強調のバランスを図りながら、試行錯誤を繰り返して、熟慮することで、氏の持つ風格を出すことができた。吉太郎氏のイメージは「薩摩のぼつけもん」に見る静かで、それでいて思い切った決断力を表現することだ。

胸像制作の仕事は、素晴らしい人生の大先輩方に学ぶことができる場でもある。東吉太郎氏は、これまで制作してきた胸像の代表作と言えそうだ。

制作も終盤に入るところ、南日本新聞に「ヒガシマル創立70周年」の記事が掲載された。私は、氏の活躍もさることながら記事には触れていない奥様の内助の功を思い浮かべた。今でも現役で精力的に仕事をリードしていかれる会長は、全社員の総合力と同時に奥様の気配りがあったからこそに違いない。

今回の依頼制作では、話になかった小さいご夫妻の群像を私からのプレゼントとして創ってみることにした。私は会長夫妻が湯上りに浴衣姿で鯉に餌をやる姿を思い浮かべた。

ご夫妻には内緒にして、こっそりと社内の方に奥様の写真をパソコンにメールで送っていたとき、制作を進めた。

除幕の時にサプライズとしてお披露目し、とりわけ奥様に喜んでいただけしたのは良かった。